

## 京都秋期福音特別集会 第1回聖書講筵

## 主の顧み

## ――ルカ伝第15章1～10節――

1975年11月22日

小池辰雄

著作集第一巻『無者キリスト』 パリサイ人・学者らの眩き 一人びとりを愛惜する 主の顧み 一人びとりが天下一品 十字架上の顧み 荷いの愛 私自身が失せたる一匹 南無キリスト 親鸞の石枕 キリストの顧み 祈り

## 【ルカ15・1～10】

1 取税人・罪人等みな御言を聴かんとして近寄りたれば、<sup>2</sup> パリサイ人・学者ら<sup>つふや</sup> 眩きて言う、『この人は罪人を迎えて食を共にす』

3 イエス之に譬を語りて言い給う、<sup>4</sup> なんじらの中たれか百匹の羊を有たんに、若しその一匹を失わば、<sup>5</sup> 九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。<sup>6</sup> 遂に見出せば、喜びて之を己が肩にかけ、<sup>7</sup> 家に帰りて其の友と隣人と呼び集めて言わん「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」<sup>8</sup> われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改めの必要な九十九人の正しき者にも勝りて、天に歓喜あるべし。

8 又いづれの女が銀貨十枚を有たんに、若しその一枚を失わば、<sup>9</sup> 灯火をともし、家を掃きて見出すまでは懇ろに尋ねざらんや。<sup>10</sup> 遂に見出さば、其の友と隣人と呼び集めて言わん、「我とともに喜び、わが失いたる銀貨を見出せり」<sup>10</sup> われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のために、神の使たちの前に歓喜あるべし』

## ● 著作集第一巻 『無者キリスト』

『無者キリスト』（1975年刊）という第一巻が出ましたが、正直これは私の今までの結晶とでも言いますか、

「私はこの一巻が出たらいつ死んでもいい」

と実際思っている。今でも、そのつもりです。自分で読んで、どの頁にも私は本当に魂がこもっていることを自分でも感じています。学校の先生方もまた父兄の人たちもかなり買ってくれましたけれども――まあ、私が校長だから買ったんでしょうけれども――本当に読めるといふことには、なかなかいくものではない。



これはやさしい。言葉はそんな難しくないけれども、ここに盛られている真理は、一朝一夕でつかめるような真理ではない。それはキリストの福音が正にそうなんです。キリストはやさしく言つてらっしゃる。けれども、

「これを本当につかんでいる人が、そのようなクリスチャンが何人いるか」

というのと、同じと言つてはおそれおおいですが、それと質を同じくしていただいているわけです。

「自分で書いて自分で書いたものではない」

という自覚があります。御霊によるところの文字というものはそういうものです。自分で書いて自分で学んでいるようなところがある。これは実にキリストのもの。もちろん、私は相対的人間ですから、書いたものが決して完璧なんて、もうとう申しません。

私はこの本ができた時にまっ先に、兄貴の霊前に捧げました。私の兄貴の小池政美なくしては、今日の私はないからです。この巻頭に、

「この『無者キリスト』を私のたましいの旅路で時機に応じ道しるべとなり、今は北十字星の如く天界に輝いている、内村鑑三先生、藤井武先生、塚本虎二先生、手島郁郎兄、小池政美の五つの霊星に捧げる。」

と書いた。私は、この「北十字星」というのは、実は中学2年のときにこの兄貴と江ノ島の西浜の海岸で一夏暮らしたことがある。その時に、江ノ島の栈橋で――今はあんなコンクリートの橋ですが、その頃は木製で、波がくれば揺れるような橋だった――その橋の上で夏の夜の星を教えてもらった。その時に北十字星を教えてもらいました。「白鳥座」という星です。ちょうど五つの星で十字架になる。これが天の川の中にあるわけです。この白鳥座はまた北十字星といって、五つの星が目に見えますが、それが私には忘れられない星なので、不思議にまたこういうことになるんです。この、

「内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎、小池政美」

年代からいうと、小池政美が一番先ですけれども、そのような五人に私が相前後して学んできた。あるいは、道標みちしるべとなってきたということは、神さまの大きな摂理があつたと、つくづく思います。

いかにもして、この本が、悩める人、求める人、悲しめる人、行き詰まっている人、そういう人、道しるべとなつてもらいたい。それだけなんです。いわゆる単に売れる売れないということでは、もちろんありません。しかしながら、そういう人たちには何とかして、この本が手に渡るようにしたい。

とにかく、

「目ある者は見るべし」

ということ、これは正直、本当に御霊に触れるまでは、この文字の内容が響いてこない。しかしながら、そこへのまた、御霊に触れる道しるべとも、これはなることを信じており



ます。どうぞ、そういうことで、私の生命を懸けたものですので、福音のため聖名のためによくご協力をお願いしたいと思います。

### ●パリサイ人・学者らの眩き

今日は、ルカ伝15章の――11節以下（放蕩息子の譬話）はこの『無者キリスト』の中にも出てますから、それはいたしません――その前の1節から10節のところをいたします。

1 取税人・罪人等みな御言を聴かんとて近寄りたれば、  
2 パリサイ人・学者ら眩きて言う、『この人は罪人を迎えて食を共にす』

もうこの1、2節をみても、人間の種類がはつきり分かる。「取税人」というのは、ローマの手下になっていますから、ユダヤ人には非常に嫌われているわけです。「罪人」というのは、律法に明るくなくて、一般の文盲な庶民です。だから、律法に詳しい祭司とか律法学者とか、あるいはパリサイ人とか、そういったユダヤの律法に非常に明るく、またそれを実際に実行している連中には見下されている人たち、一般の庶民です。いわゆる罪人ということではない。それから、福音的にいうところの「罪びと」でもない。これも御言を聴こうとしてやって来た。

1 取税人・罪人等みな御言を聴かんとて近寄りたれば、

「取税人や罪人」という、心の、むしろ貧しい人たち、それが本当にキリストの言葉を聴こうとして来た。そうすると、

2 パリサイ人・学者ら眩きて言う、

この「眩き」というのが、批判的な、いやらしい批判的な精神である。本当の批判ならいいですけども。いわゆる批評がましいところの嫌らしいご連中が眩く。眩きの気持がおきたら、これはもうサタンの囁きと思わなくてははいかん。

『この人は罪人を迎えて食を共にす』

「キリストは罪人を迎えて食を共にする、とんでもないことだ」

と。福音書の方々に、この「眩きて」という言葉が対照的に出てますから、よくわかる。マルコ伝2章12節あたりからあつたでしょ。

15 而して其の家にて食事の席につき居給うとき、多くの取税人・罪人ら、イエス及び弟子たちと共に席に列る、これらの者おおく居て、イエスに従えり、  
16 パリサイ人の学者ら、イエスの罪人・取税人とともに食し給うを見て、

その弟子たちに言う『なにゆえ取税人・罪人とともに食するか』  
17 イエス聞きて言い給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。』

我は正しき者を招かんとにあらで、罪人を招かんとて来れり』  
(マルコ2・15)

17

ところが、自分をよしとしている連中は実は、本当の罪びとなんです。「取税人・罪人」



といわれる、御言を聞くこととしていらっしゃる方が「義人」になるわけです。全く反対です。

●一人びとりを愛惜する

3 イエス之に譬を語りて言い給う、4 なんじらの中たれか百匹の羊を有たんに、若しその一匹を失わば、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出すまでは尋ねざらんや。5 遂に見出せば、喜びて之を己が肩にかけ、6 家に帰りて其の友と隣人と呼び集めて言わん「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」7 われ汝らに告ぐ、斯のごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改めの必要な九十九人の正しき者にも勝りて、天に歡喜あるべし。

非常に直截に簡明に書いてあるが、内容は非常に深い。羊はたくさんいます。牧者はそのたくさん羊を――あんな同じような顔をしているんだが――ちゃんと見分けがつくだそうですね。

先生でも、生徒の顔の見分けが早くつかないといかんし、名前を早く覚えなければいかんわけですが、私なんかはその点で先生としては落第生なんですけれども。十把一絡げに見ているうちはダメ。校長というのは、この十把一絡げで困るんですよ。朝礼で千人だの五百人だのを集めて、お話をするでしょ。けれども、私は言うんです。

「君たちみんなに私は語っているのではない。君たち一人びとりに語っているんだから、そのつもりで聞いてもらいたい」

と言うよりか仕方がないから。そういうような気持で言うんですけれども。

「二対一の話なんだぞ」

ということですね。

「校長はあそこでしゃべっているから、まあ、適当に聞いておこう」  
なんて、適当に聞かれては困る。

「二人ひとりに本当にぶつかって、私は言っているんだ」

ということ、決して形式的な朝礼は私はやってません。ですから、本当に静かに聞いてます。私語すると、すぐ分かる。そうすると、私は怒鳴るから。

「若その一匹を失わば」

とある。イエスの宗教は「一」を非常に尊ぶ。いつかも、

「一の宗教」

ということを言いました。何人いようが、何百人、何千人いようが、要するに「一」なんです。いわゆる衆愚主義ではダメです。民主主義というやつは、どうも多数決で「多」を頼んでいるような在り方をする。だから、何か中心がなくなってしまうって、ただ数だけを問題にしている。ところが、大事なはこの「一」です。

歴史を動かすものは「一」なんですよ、「多」ではない。皆さん一人びとりの存在が、人



に見えようが見えなからうが、本当に歴史を動かしているところの大事な存在である。神さまの歴史におけるところの大事な存在であるということに自覚していただきたい。どういふことをしたのしなかつたのと、そんなことではない。存在そのものが、

「天国を築くのに自分一人が欠けたら、この天国の石垣は崩れる」

という。その一人を惜しむ、愛惜する。「一」を愛惜している。愛し惜しむんです。

その「一」は、健康であろうと病気であろうと、利口であろうと馬鹿であろうと、大きくかろうと小さかろうと、富める者であろうと貧しき者であろうと、そういう相対的な判断ではないですよ、この「一」というのは。宗教の世界はすべて絶対なんです。相対的な比較の判断をしているうちは、本当の世界に入れない。

## ●主の顧み

そういうことで、私は、

「主の顧み<sup>かえり</sup>」

と今日は題しましたが、あなた方一人ひとり、のつびきならない意味あいと内容において神さまから顧みられている。

「私はそれほど顧みられていないようだ、あっちの方がよっぽど顧みられている」なんてことは無い。そういう比較はできないんです、この人格的存在というものは。

大体、学校の教育がまちがってます。こないだも私は成績会議のとき言ってやった。紙の上の答案の出来不出来ばかり問題にしているから――まあ、「ぼつかり」と言うては言い過ぎかもしれませんけれども。

「こんなのも出来なくて、もう弱ってしまっ」

という、先生も匙をなげるようなのがいるんだよな。けれども――私は言ったんです。

「どんなに出来なくても、何かこの子は世の中に出て、この子でなくてはという役割があるはずだ。それを顧みてやらなくてはいいかん。それを尊んで、そして育てることが大切だ」

と。落第点をとったつていいんだよ――

「いいんだよ」

なんて言ったつておかしいけれども――落第なんかさせなくたっていい。ということとは、怠けても結構だということではない。学科はできなくても――数学ができないやつはしょうがない。漱石だつてそうだ。けれども、あれは大文豪です。あれは数学ができなかつたが、あの文豪にけちをつけるわけにはいいかん――しかし、

「みんなそれぞれ賜りたる大事な才能がある。それには打ち込め。それを怠けていたら、もうしょうがないぞ」

と。また、学問はどれもダメだと。いいよ。手先仕事が好きなら、おおいにその手先の職



人のところに行つて、弟子入りしたらいい。学校なんかさきつとやめて、弟子入りして、日本の屈指の名工になればいい。

どうして、日本という国は、

「大学卒でなければいかん」

ような妙な観念がはびこっているかね。私は、本当は大学生なんて嫌いなんだ。そういうレットル大学生がたくさんいるから。もつと生き生きとそれぞれの個性を本当に生かすようにしなくては。

大体、学校の制度がまちがっています。たくさんもつと専門学校があつていいわけです。床屋さんの学校があつていいし、左官屋さんの学校があつていいし、たくさんそういう学校をつくつたらいい。そして、それに打ち込んでやればいい。社会というのはそれだけの有機的な構造になっているんだから。大工さんが足りないだの、左官屋さんが足りないだのということがなくなってしまう。職業に貴賤はないですから。ところが、なんだか、妙なそういう観念があるから、これをぶち破らなくてはいかん。お母さんたちに私ははつきり言つてやるんですよ、父母会のとときに。それをしっかりと自覚してもらおう。

しかし、一番、心に本当にそういった土台がすえられるためには、どうしても宗教の世界にこなければダメなんです、いわゆる教育の限界内では。本当の教育も宗教がなくては。だから、「宗教と教育」（著作集第1巻『無者キリスト』／無的実存／第6章宗教と教育）という一論文を書いたでしょ。論文というほどでもないですけども。「宗教」と言うと、何か特別なものだと思う。冗談じゃないよ、これは一番、空気と同じなんだ。空気が大事なように、宗教の世界は、魂があるかぎり誰でもが、

「万人は宗教人である」

ということですよ。この書の中にも私は書きました。今はつきりものを言う人がいないから、しようがないというわけです。何と言われても仕方がない。

●一人びとりが天下一品

キリストが、

「もし、その生命を失わば、全世界を得るとも何の益かあらん」

と言われたでしょ。人ひとりの生命が全世界とも比較のできないほどの重さを持っているという。これは論理的には成り立たない話です。けれども、キリストのはそんな平面論理の言葉ではない。

それほどまでに一人びとりが、人ひとりの存在が世界を担っているような意味を持っている。ということは結局、一人びとりは神において絶対的な意味を持つているということです。絶対的な内容を持つているということです。

「神において」



ですよ。神を抜きにして、「絶対」なんて言ったら、とんでもない話です。そんなこととはんでもない傲慢になる。

この相対的な存在が、神においては、キリストにあつては、絶対的なものを持っている。他のものとは比較ができない。皆さん一人びとりが天下一品である。その「一」を顧みている。その「一」が谷に落ちた。この場合は羊だけけれども。羊に例えている。いかに一つ一つを深く顧みているか。お母さんが、四人も五人も子どもがいてさ、どれもこれもちゃん心の中にそれぞれ入っているんだ。弱い者ほど、むしろ顧みは深い。

### ● 十字架上の顧み

その「一」がどこかへ消えてしまったら、

若しその一匹を失わば、九十九匹を野におき、往きて失せたる者を見出みいだすま  
では尋ねざらんや。

それほどまでに「一」は、

「九十九匹あるから一匹くらいどうなつてもいいや」

なんていうのではないですよ。そういう計算ではない。何か妙な経済的ソロバンとは違ふんです。そういうように、

「我々は本当に顧みられている」

ということを少し瞑想してごらん下さいよね。

「そうか、そんなに顧みられていたら、私は何をしなくてはならないだろうか」

なんて、えらく責任を感じずる。しかし、自分でいわゆる責任を感じたつて、これはどうにもなりませんよ。

神さまの顧みというものは、そこに力がくる。神さまの顧みというのは人間の顧み方ではない。神さまの顧みは深い愛のかかった顧みですから。愛惜する。そして、この顧みには必ず力がくる。神さまの顧みの愛を感じると、力がくる。いくら責任感があつたつて、力がなかつたら、しょうがないではないですか。苦しくなるよ。しまいにはノイローゼだ。ところが、神さまの、キリストにおける顧みになつてくると、力が来ますから。

「自分は、そんなにまで顧みてくださっていますか」

と言って平伏すでしょ、神さまがあり難くて。有難い。こっちはちつとも価値がないんだから。

「こんなダメな野郎を、こんな破れ器を、みんながけなすやつを、先生方がもうお前はダメだなんていう、こんな私を神さまは顧みていてくださる。有難いです」

と。さつき、「いつくしみ深き」の讚美歌(312番)を歌つたのも、その気持からです。

「人は棄つれども」

という。キリストの顧みがきている。人に棄てられるよりもはるかに素晴らしい。



キリストの顧みとは何ですか。キリストはどこで顧みてくださったか。十字架です。この十字架の上からキリストは顧みてくださった。

「私はお前のためにこのように生命を棄てた」

と。キリストの顧みは十字架上の顧みである。即ち、生命を棄てて、この破れ器を完全に贖いとっている。それは、相対的でないの悪いのという、相対的な善悪の彼岸です。

ニーチェがいくら言ったってダメだよ。福音の世界に來なければ、この善悪の彼岸のことは分かりはしない。あなた方、哲学者や思想家の言葉に決してうろたえることはない。福音の世界で見てごらん下さい。もちろんそれ以上ですから。ニーチェやキルケゴールをやってもいいよ。けれども、それだけではあつちこつちにさ迷って、結論が出なくて、最後にはいい加減なことになってしまう。

それは聖書に來ないからダメなんですよ。まず聖書に來て、一番奥をつかめば、ニーチェだろうが、キルケゴールだろうが、ダンテだろうが、ゲーテだろうが、トルストイだろうが、何だつてつかめてしまう。私みたいな小さな男が、ダンテであろうとゲーテであろうと何でもつかめるなんていうことは、あなた方は、とんでもない野郎だと思うかもしれないけれども、そうじゃないんだ。私が見ているんじゃない。キリストの光で見ているんだから。

ゲーテは、

「キリストの前には無条件に頭をさげる」

と言ったではないですか。頭をさげようがさげなからうが、そんなことに関わりませんよ、キリストというものは。

皆さんはまだ、キリストというものを何かつかめたような顔をしてはいかん。これは限りなくキリストにつかまえられるだけの話なんです。こつちからつかめたなんて、とんでもない話だ。限りなくキリストという無限無量の方につかまえられるから、ありがたくてしようがない。平伏さざるを得ない。そうすると、力が来ざるを得ないんです。光は臨まざるを得ない。親鸞の、

「弥陀の本願の劫力」<sup>ごうりき</sup>

という角度がそうなんです。『歎異抄』は素晴らしい本ですよ、いつか京都でもお話ししましたけれども。

## ● 荷いの愛

5 遂に見出さば、喜びて之を己が肩にかけ、

どこで見いだしたか知らん。谷底までも行くでしょう。どこまでも、危険を冒して。谷底から担いで行く。これが荷いの愛です。荷いの愛をもって、これをついで行く。だから、キリストの顧みは、さつきから申しあげているように、力を与えるところではない。荷つてくださっている。荷われているんだ。あなた方はぶつ倒れたら、キリストは荷つてくだ



さる。

手島郁郎さんという人が――今の奥さんはちよつと助からないような病気だった。動けないですよ、真つ青で――だけれども、阿蘇の集会の後で、これを手島さんは担いで山をおりてきた。熊本駅のプラットホームを彼が奥さんを担いで歩いてる姿を私は今でも覚えてる。手島さんという人はそういう人だ。その姿に手島さんの本質を見た。何と言われても、彼にはそういう愛があつた。それを貰いた。彼は御霊の世界で、

「聖霊の愛」

ということを言った。これは至言です。無教会で手島さんをはつきりと認めたのは私ひとりです。あとは何のかんと言つて、手島さんにいろんな聖霊の現象が起こると、無教会からはおかしく言われる。そうじゃないんです。手島さんというのはいろいろな面があつたかもしれない。けれども、どういう器を通してでも神さまはそこに大事なものを開示しようとなさるときには、なさるんです。人間の側がどうかではない。

誰を使つても、神さまは本当にキリストの前に平伏す魂をお使いになる。人間の側の判断ではない。むしろ、立派な人の方がかえつてダメです。自分を誇つていようなパリサイ的な者は神さまには使われない。人間の相対的な善悪が問題ではない。神の前に平伏するか平伏さないかだけが本当の人間の姿です。

イエス・キリストが神の前に最も平伏したひとですから。だから私は、

「無者」

と申し上げる。自分を何ものともしない。

そのような荷いの態勢をもつて、迷える一つの羊を荷いあげた。そして、さあとつて、隣人や友を呼んで、

「我とともに喜び、失せたる我が羊を見出せり」(ルカ15・6)

「我が」と特に書いてある。私たちは、神さまが「わが」という、神さまのものなんです。神さまが「わが汝」と言う。

「わが誰々」

と、一人びとりの名を呼んでくださっている。

人にどう評価されようと、いいですよ。かえつて、人にけなされ迫害され、いろんなことを言われて――無教会で私は、先生方や友人もみんな向こう側に立ってしまった、

「手島と小池はすこしおかしい」

というわけで。おかしいどころのさわぎではない――私は無教会のアウトサイダーになったら、キリストの直弟子たちのインサイダーになった。だから、もう楽しくてしょうがない。天界に私の味方がいっぱいいる。素晴らしい味方が。パウロさん、ペテロさん、ヨハネさんなんてのは大変なもんですよ。これが天界の友たちだからね。

それは本当にそうです。弧にして弧ならずというのがそのことです。独りでちつとも独



りでない。それは人間的には寂しいこともあるでしょう。けれども、もうひとつ奥に入ると、ちつとも寂しいどころのさわぎでない。

「よし、きたー！」

といって、なおさら元気が出てしまう。敵が多ければ多いほど。いや実は、敵はいないんだよな、敵なんてものは。相対的な敵なんてものを敵だと思っっているうちはまだ本ものではないから。そうですよ。同じ次元に立てば敵だけれども、もうひとつ次元がこっちが上になってしまいうから、相手がいないわけですよ。ずいぶんおそれたようなことを言うけれども、本当ですよ。キリストの世界に入ったら、いわゆるそういった意味における相手なんかありませんよ。

しかしながら、みんなを本当の相手とするんです、今度は逆に。この「相手」という言葉の内容がちがうけれども。

### ●私自身が失せたる一匹

皆さん、どうですか、その判断は、もうすべてそういった相対的な同じ次元にいるような判断からズレてください。いい意味においてズレるんです、乗り越えるんです、越えてしまう。それが本当の「一」の自覚なんです。

そのように十字架上で顧みられている私たちは、十字架上かとおもったら、今度は復活のキリストが、御霊をもったキリストが、御霊のキリストが顧みてくださる。十字架のキリストと御霊のキリストが全くそこで一つになっている。それで顧みてくださるから、これは力がくる。十字架のキリストは、憐れみをもって私たちを顧みます。御霊のキリストは、私たちに力を与え、もの凄い迫力をもって――片一方は憐れみのどん底、もう一方は迫力の絶頂――白熱的な事態をもって我々にかかってくるから、人間の判断を越える。

その顧みを本当に受けとって祈ったら、癌だって治ってしまうよな。癌細胞なんてやつつけてしまう。もの凄い白熱の力がくるから。誰か実践してください、癌にかかったらね。

「俺は癌にかかったからもうお終いだ」

なんて、「お終い」なんて思わないように。

「何くそ、よし、この一般の医学の判断を乗り越えてやるから。しめた」

なんて（笑）、それだけのことになったら、大したもんだな。癌にかかったら、

「しめた」

なんて笑って、それをやってやる。

そのような意味において私たちが神さまの、キリストの顧みをいただいているというこの一事。この「一」は、私たち一人びとりのつぴきならない問題ですよ。いい加減な気持ちで私たちはこのところは読めないわけです。失せたる一匹なんです、私自身が。あなた方一人びとりが。この失せたる一匹をキリストはこんなにして顧みて、かくして背負って



くださった。助かったと。そして、本当にこれは天界でもって――隣人どころのさわぎではない――天使たちが喜んでくれる。喜ぶ隣人がいなかったら、天界の天使や使徒たちや天界に行っているキリスト者たち、これが本当に喜ぶ。

我々の世界は地上だけではないですよ。立体的な、現在がそういった永遠的なものをもっている。天地一如です。「天」といって天を見るけれども、空は地面まで来ているではないですか。天地一如。天と地の間に何かありますか。何も無い。天は地までおりている。この天地一如のような、非常にぶ厚な現実ですよ、信仰の現実というのは。私は、天界のこの五人の人たちだつて、地上に居た時より親しい。

### ●「南無キリスト」

手島さんが2年ばかり前に天界に往つてしまった。弟子たちは、

『生命の光』はもうお終いだ」

なんて思ったらしい。無教会では、そういうふうにして、先生が亡くなるとその雑誌を廃刊にする。それをえらく何か結構なことだと思つている。それは人間的に思つたら、結構なことですよ。けれども、

『生命の光』は聖霊の導きの雑誌だから、手島さんが仆れたからといって、冗談じゃない、これは歴史の終わりまでお前たちは続ける」

と私ははつきり言つた。それでもつてすっかり勢いを得てしまつて、こないだ300号記念の時もそのことを言つておられたです、

「小池先生のその一言が〔雑誌の継続を決めた〕」

といつて。だから、どうですか、手島さんが天界へ往つてから、彼らはもつと力が出てきた。そして、数も増してきている――なにも数のことを言うのではないけれども。本当に力強く展開しています。冗談じゃないですよ、聖霊と言いながら――なにも数のことを私は言うのではないけれども――一人の存在がどれほどの力を持つているかということを自分で自覚しなければダメですよ。もの凄い爆発力を持つている。原始力です。原始力的存在。これはキリストの原始力だから。原始の力。キリストの原始もとの力、ウルクラフトをいただいている。

私は、それは眠い時は眠いき。だけれども、本当の意味で「疲れ」というものを知らないんだね、バカみたいいなもので。

「小池先生なんてのはバカだから感じないんだろう」

なんて（笑）。本当に私はそうなんだ。そういうキリストの力、これはもう説明できない。

私はその点で仏教はうらやましいと思うよね、この

「南無妙法蓮華経」

「南無阿弥陀仏」



は。あれは素晴らしい言葉です、ことに「南無阿弥陀仏」は。私はこの本を、仏教の先生がいたから、その表紙に「南無阿弥陀仏」と書いてやった。そしたら、びつくりしていた。「それはどういうことですか」

と。それから説明してやった。これは私にとつては、キリストの「南無阿弥陀仏」だ。「アマッター」、無量寿無量光、限りなき生命、永遠の生命、無量の光の「覚者」、それをちゃんと悟りもっている者「仏」に帰依することが「南無」。即ち、

「無量寿無量光の覚者キリストに帰依する」

ということ。私はキリストに対して「南無阿弥陀仏」と言えるんです。ただ「南無阿弥陀仏」と言うと、すぐ仏教だというように響くから、ちょっと困るけれども。それは

「南無キリスト」

だつていいよ。「南無キリスト」は「南無阿弥陀仏」と同じ。キリストはもちろん

「あぶら膏注がれた者」

だから、

「聖霊の証者に帰依する」

ということですよ、「南無キリスト」ということは。御霊の証者に帰依する。

電車の中でもどこでも、魂の奥底で

「南無キリスト！」

と称えてごらん下さい。直ちに力がくるから。どこだつて瞑目すれば、直ちに深山幽谷だ。魂がそれくらい自在なことにならないといかん、

「ここはやかましくてしょうがない」

というのでは。肉の耳に何が響いたつて、そんなものは魂の世界には響かないだけの気持ちにならなくてはね。

まず、行き詰まりを知らない人になるです、この「南無キリスト」が本当に身につくこと。しかし、仏教で「南無阿弥陀仏」を本当に身につけている信徒が幾人いるかというわけだ。

### ●親鸞の石枕

親鸞なんていうのは、「南無阿弥陀仏」が本当に身についている。ちょうど今頃の季節に北陸の方を親鸞が歩いていて。柿崎という所に来て、日が暮れてしまった。泊まる所がないので、ある一軒家に辿りついて、戸を叩いて、

「まことに申し訳ないけれども、今晚泊めていただけませんか」

と。家人が戸を開けたら、立っているのは乞食坊主だから、親鸞はボロを着ているから、

「こんな乞食坊主を入れられるか」

といって、その婆さんはまた戸を閉じてしまった。



「ああそうですか、でもご縁がなくて申し訳ない。せめても軒下で寝かせてください」

と。軒下で石枕――親鸞の石枕という――石を枕に寝た。讚美歌にもあるな。夜中に目が覚めて、ちよつと気になったんだな、その婆さんは。戸をちよつと開けて見たら、親鸞の身に光が射していた。それでびつくりしてしまった、

「これは大変な人だ」

と。南無阿弥陀仏が本当に化体しているから、親鸞はそういう実存です。それでもう婆さんは平伏してしまった。動けなくなってしまうた、霊的に打たれてしまって。そして夜が明けてみたら、婆さんがそこにひざまず跪いているものだから、親鸞は、

「どうしましたか」

「こういうわけでまことに申し訳ありませんでした」

「いやいや、そんなことは心配いらん。どうもありがとう、一晩寝かしてもらいました」

と。それで立ち去りました。婆さんはたまらないものだから、後を追いかけて行った。したら、小川が流れている。小川に橋がかかっているのに、親鸞は向こう側に渡っている。水渡りしたらしいね、親鸞は。どういうことか知らんけれども。向こう側に行っている。これは多分、親鸞は棹を使つたんです。棹でもつてヒラリと身をかわしたらしい。棹は持つていたんだな。そしたら婆さんが、

「上人さま、まことに申し訳ないが、私はありがたくてしょうがないから、何か一

筆書いていただけませんか」

と。親鸞は手拭いをとつて「南無阿弥陀仏」と書いて、棹の先に付けて向こう側に渡してあげた。そういうお話です。

本当の世界はそういうこと。第一流の坊さんというのはそうです。皆さん一人ひとり第一流の坊さんになれるんです。キリストを本当に化体すれば、こちら側の条件はひとつもいらん。無条件の世界。むしろ自分の何かを誇っているうちは絶対にダメです。イエス・キリストが実に何ものをも誇らなかつた。

「なぜ、私を善いと言うか」

と言われた。

だから、一般の道徳的水準でまだとやかく言っているうちは、本当の世界には入れない。道徳を無視するわけではないですよ。今は道徳すらダメになつてしまっているから、大いに道義も立たなくてはならない。私はもちろん孝道師道ということをはつきり学校で言っています。いきなりこの深い世界には、中学・高等学校の生徒には無理だよな。けれども、私は言う時には、この世界からものを言っています。それで、何か打つものがある。

「やはり、あの小池校長はどこかちがつていたな」



ということが後でわかってくれれば、それでいい。

## ●キリストの顧み

それから今度は、お金のことが出てきたね。イエスは面白い譬たとえを言われる。

「<sup>8</sup>又いずれの女が銀貨十枚を有もたんに、若もしその一枚を失わば、灯火ともしびをともし、家を掃はらいて見出すまでは懇ねんしろに尋ねざらんや。<sup>9</sup>遂に見出さば、其の友と隣

人と呼び集めて言わん、「我とともに喜べ、わが失いたる銀貨を見出せり」

<sup>10</sup>われ汝らに告ぐ、斯かくのごとく悔改くわいあらたむる一人の罪人つみびとのために、神の使たちの

前に歡喜よろこびあるべし』(ルカ15・8～10)

要するに、物であろうと、本当の意味において物も大事にしなければなりません。今は非常に粗末そまつにしていますから。ということは、ケチケチするということはちがう。私たちは、小学校の時に筆箱をいただくでしょ。そうすると大事に使ったものだ。いつまでもね、ボロボロになるまで。

「物を粗末そまつにはいけません」

ということとはよく言われていた。今は物がえらく生産過剰せいさんかじょうになって、みんなこの頃の若い人はどしどし捨てるすてることが道だみちと思っている。

とにかく、そういうようにして、深く神さまは私たち一人びとりを顧みて、そして人の批判ひはんいかんにかかわらず、判断はんぱんいかんにかかわらず、神の国の大事な存在しんぞんとして顧みられている。しかも、その顧みは力をもつて私たちに来ていらつしやる。そのことをこの御霊の世界をもつて本当に受けとつていくときに、この15章のこの譬話たとえばなしは私たちの身につくわけです。

私の集会の大事なメンバーの一人だったけれども、一向この頃何かどういふ訳わけだかしらんけれども、やって来ないのがある。どうしているのかなと思つて、私ももちろん時には心から祈いのちつてはいますけれども。普段なら、この『無者キリスト』も送つてやるところなんだけれども、うんともすんとも言つてこないから、送らないでいた。そうしたら、昨日、その男から速達すみたくがきた。誰か友だちがこれを渡したとみえる。その手紙を私は読んだら、ちよつとびつくりした。詩うたみたいな手紙です。

「先生、感無量かむりやうです。嘗かつてこれほど直截ちよくさいに且つ大胆たうたんに主を描いた書があつたらうか。

日本に投じられた真のキリストの姿をつつす書。『無者キリスト』！ あまりに圧縮あつしゆくされているからこの書物は正座をし、祈心いのこころでひれ伏して読まねばならない。僕にはまだ本当には読めない。これほど激しく、きびしく、そして熱き書物が、この愚かな僕に読めるはずがない。なによりも先生をかく書かした、主様を崇め奉る。そして、諸々の中傷ちゆうきやう、誤解ごかい、偏見へんけんの中を、聖霊せいれいに燃やされて突き進んできた先生の行程しんぎやうに僕は涙を禁じ得ない。表紙のキリストの顔が先生の全てを語っている……。僕はたまらない。



いつの世でも本当の「預言者」、本当の「異端者」は、そのよつにあつかわれる。悲哀の底から吐くことば……。挿入のレンブラントの絵も先生の言で生命づけられている。なんたる書物か！ なんたる福音か！ なんたるキリストか！ ああ『無者キリスト』がうめいている、うめいている、うめいている！

「万斛の涙を靈泉となし、満身の血潮を烈火となし、全身に漲る聖靈を台風となしてこの20世紀の危機の世に一篇の大詩篇を投せんとする」

その人よ！ 涙の人よ！ 白熱の靈人よ！ 『無者キリスト』を読了して。」(S・F)

「ハレルヤ」42号(1976年3月)、『無者キリスト』の読者の声に掲載

私はむしろ驚いた。この青年はやはり神さまに顧みられていた。この主の顧み、また彼の純情に私はむしろ打たれた。そういう、人間はどのような所を通らせられても、キリストの顧み、キリストの愛、これだけは本当ですから、これには絶対に――信頼するという、こちらから信頼するという力みではない――これを本当に受けとって直ちに、豁然として力がくる。この気合をいつでも身につけてください。そうしたら、行き詰まりを知らない人になる。いかなる時にも、いかなる所においても、無条件に、直ちに即刻この世界に入る。本当の宗教の世界はそういう気合の世界です。

そのようにして、どうぞ――まだ明日、明後日とありますが――私たちはこのキリストに本当に捕まえられて、祈りの世界で深く入っていききたいと思えます。おわります。

## ● 祈り

この日本の国を深く顧み、この歴史を顧みてありたもうところのまことのおん神さま。今、日本は、本当にいずこへ行くかという姿です。あなたの日本歴史を導いてくださっていた密かなる深いおん顧みを思うときに、私たち福音に呼びいだされた者、いよいよ御名のゆえに、また御名にあつて、福音にあつて、この日本をあなたの顧みに即して思わざるをえません。今、日本の国は八方塞がりです。いろいろな問題が雑然として解けません。これは本当に畏るべきものを畏れることを見失っているからと思えます。

かつてこの三高会館で二、三人で祈った時に、U兄弟に示しがきました。パウロの呻きの、また主さまあなたの呻きの御言です。

「悔改めよ、しからずんば日本は滅びに向かう」

という趣旨のものであります。どうぞ、この国は本当にあなたに立ち帰る、あなたに目を向ける、改心を起こす人がこの国の中に幾人か本当に若い人たちの中に起き、そして、危ういこの精神状態に対して敢然として本当の、

「我は真理なり、生命なり、道なり」

という、あなたを身をもって証しするところの、ルッターのごとき、またパウロのごとき、



また内村鑑三のごとき人物が――器は大であろうと小であろうと――どうぞ、この中からあなたが今顧みて、これを起こさんとしていらつしやることを信じます。

どうぞ、主さま、人ごとではありません。一人びとりが顧みられていることは、御名のゆえです、福音のゆえです。それがゆえに、主さま、どうぞ御名のゆえに、また御名にあつて、私たちはいよいよあなたのおん顧みに即して行きたく存じております。そこにこそ本当の力がきたり、光がきたり、希望がきたり、神さま、勝利が来ることを信じております。

そのようにして、私たちの側の何ものでもありません。どうぞ、この兄弟姉妹たちがそのようなあなたの顧みの御恩寵の中に入れてあることをはたと気がつき、大歡喜をもつて進んで行くことができますように願ひ奉ります。これが本当に喜びの音信です。御名のゆえの喜び、御名を讃え奉ることです。神さま、本当に私たちの生涯がその意味において本当に讚美より讚美であることができますように願ひ奉ります。

兄弟姉妹たちと共に、この秋の京都における特別集会がそのようにして打つて一丸とせられ、御名の顧みを、神さま、本当に私たちは魂の奥底に印せられて進んでまいります。かくして、この兄弟姉妹たちと共に本当に御名を讃え奉ります。

僕しもべの小さきこの『無者キリスト』の本もただ御名のゆえに、神さま、お使いください。どうぞ、私たちのこの祈りをその意味においてのみ聴いてくださるように切に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちのそれと共に、御名により捧げ奉る。アーメン。

